

遊女 芸能集団から「遊郭」へ

女性史学賞に辻浩和さん著作



「女性史学賞」の受賞記念講演をする辻浩和
・川村学園女子大准教授＝奈良市

女性史の優れた研究に贈られる第12回女性史学賞（奈良女子大アジア・ジェンダー文化学研究センター主催）に、川村学園女子大准教授の辻浩和さん（35）の著作が選ばれた。昨年12月16日、奈良女子大学（奈良市）で授賞式があった。

中世から近世 生業の移行分析

辻さんは著書「中世の〈遊女〉——生業と身分——」（京都大学術出版会）で、9〜16世紀ごろの「遊女」と呼ばれた女性たちについて生業の実態やその集団のあり方、社会的な身分の変化などを分析。遊女には売春のイメージが強いが、辻さんは遊女たちが古くは和歌、そして、平安時代後期の11世

紀ごろからは、庶民から貴族まで幅広い層に流行した「今様」と呼ばれる歌謡を得意とした芸能者で、京都周辺の貴族や王族の屋敷に呼ばれて芸を披露したとみた。遊女たちは助け合ったり、芸を継承したりするために集団をつくり、そこに集まった家族では遊女が家長で、その仕事は「家業」として母から娘へと相続されたという。

しかし、13世紀後半になると「今様」が衰退し、遊女の生業でも売春の比重が高まった。15世紀後半、家長は男性が務め、女性はそれに従属するという考え方が一般化した。男性が「遊女屋」の亭主となり、遊女たちを社会の中で隔離しようとする風潮も強まり、吉原に代表される江戸時代以降の



「遊郭」に移行したとみられる。選考委員会は、辻さんの研究を「日本史だけでなく、民俗学や社会心理学の方法論も取り入れ、新しい研究の枠組みを示した」と評価した。

辻さんは「今後は、中世の遊女集団から近世の遊郭への移行過程を、さらに掘り下げたい」と話した。

同賞は、女性史研究の草分けで文化勲章受章者の脇田晴子・滋賀県立大名菅教授が中心となって創設。主に脇田さんの寄付で運営されてきたが、2016年に脇田さんが死去。今回から運営を奈良女子大が引き継いだ。

授賞式では社会学者の上野千鶴子・東京大名菅教授が「志を受け継いで」と題して講演。「脇田さんらが切り開いた女性学やジェンダー研究を継承しようという動きが、若い研究者たちから主体的に出てきた。しかし、フェミニズムやジェンダー研究は、性差別が解消すれば、なくなってもいい存在。いつか『もう十分にやった』と言えるような終わり方ができることを期待している」と語った。

（編集委員・今井邦彦）